

高原町 30代 男性 養護老人ホーム職員



とつぜん襲った地鳴りや窓を揺らす空振^{※1}

「安心して」と利用者へ声かけ

午後3時くらいだったでしょうか。利用者さんが「新燃岳が噴火した」と教えてくれまして。外を見るとモクモクとした噴煙がこちらにどんどん迫ってくるのが見えたんです。

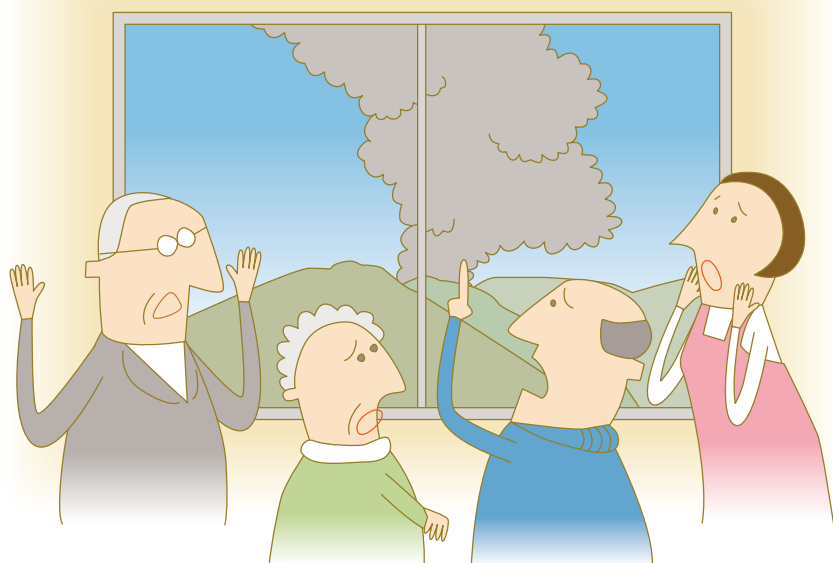
その日の深夜、地鳴りと共に窓ガラスがガタガタと揺れ始め、30名以上の方が起きてこられました。地鳴りや空振^{※1}も恐ろしいものでしたが、火口付近で立ち上がる火柱や噴雷はこの世の光景とは思えない異様なものでした。

利用者さんの中には、帽子やバッグを身につけ、不安な面持ちで一夜を過ごされた方もいました。「この建物は鉄筋やっで、頑丈よ。安心しやいね」と、職員みんなで声かけをして安心してもらいました。

激しい空振^{※1}はその日だけでしたが、しばらくの間は園内のガラス全てに保護フィルム^{※2}が貼られました。

※1 空振とは、爆発や噴火などで起こる大気の振動のこと。

※2 ガラス飛散防止フィルムのこと。



小林市 30代 男性 自動車販売業



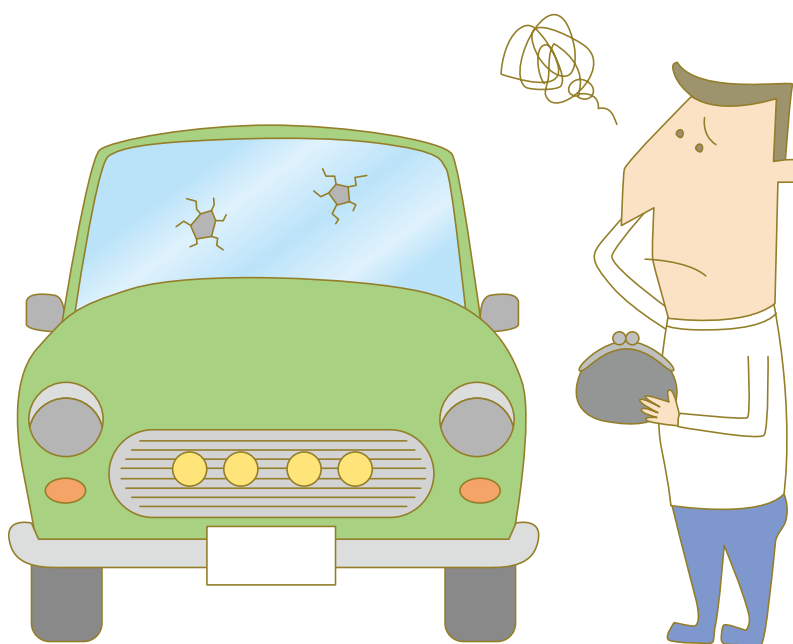
保険がおりない天災での被害

保険特約に入っておらず約10万円を自己負担

新燃岳から近い位置にあるため、灰よりも噴石の被害が甚大で、噴火から2日で約300枚のガラスを手配しました。ガラスの交換作業はそんなにあるものではないので、社内だけでは追いつかず、他県にも応援を要請しました。全ての車のガラスを交換するまでかかった期間はおよそ1ヵ月。その間はお客様への代車の手配などの業務も加わりますから、通常では考えられないほど忙しい日々が続きました。

ガラスの値段は、軽自動車でも約10万円。天災では特約に入っていない限り、保険がおりません。ガラスにヒビが入ると車検を通すことが出来ないのも、交換は絶対なんですね。車が無いと移動が困難な地域ですから、お客様にとっては痛い出費になりました。

お客様の中には、次の噴火に備えてカバーなどの保護具を購入される方もいらっしゃいました。



気仙沼市 50 代 男性 市民会館職員



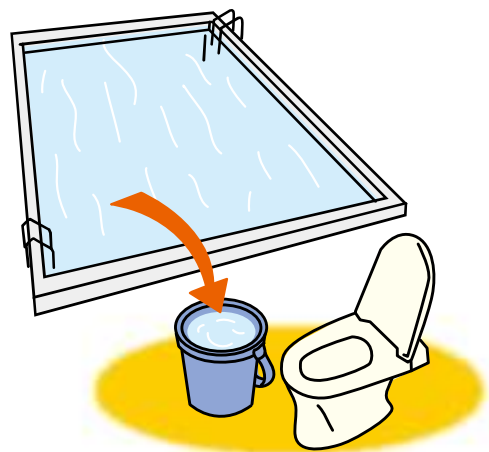
プールの水をバケツでトイレに
実は使えた受水槽

私は昭和 53 年の宮城県沖地震も経験していますが、今回の地震は今までに体験したことのない揺れと長さでビックリしましたし、とても怖かったです。

その日は、いくつかのイベントが行われていて、一つ大きなイベントが終わり、大勢の人がホールから出てくるところでした。すぐに外に避難するように指示しましたが、一部の方たちが、簡易テーブルの下に避難して、動こうとくれません。天井が落下する危険性だってあります。仕方がないので、一緒にテーブルの下に避難しましたが、もっと強く言って外に避難させるべきだったのではないかと反省しています。

夕方、市民会館を避難所として開設しましたが、当日は 650 人ぐらいの人が避難してきて、玄関の二重扉のところまで人があふれていました。そのうち電気が止まり、水洗トイレが使えなくなっていました。近くの学校のプールからバケツを借りて水をくみだし、トイレに使用することにしました。受水槽に 20 トンの水がありましたが、ポンプが 200 ボルトで使用できませんでした。

17 日に電気は復旧しましたが、後から、受水槽の水は電気を使わずに使えるということがわかりました。事前に設備のことをちゃんと把握しておくべきでした。



インタビュー日：2012 年 9 月 23 日

新地町 60 代 女性 社協職員



自家用車内の避難者を数え忘れ、みそ汁が不足し大騒ぎ！

地域の炊き出し班長の私は、避難所となった体育館で、震災当日から炊き出しを開始しました。地区の人口も考慮して、体育館内の全員に行き渡るように 400 人分のみそ汁を作りました。第一にこども、次に高齢者、最後に大人という優先順位が自然にできあがったときは、「やはり日本って、すごいなあ」と感心しました。

ところが、みそ汁に並ぶ行列はいつまでたっても絶えず、しまいには足りなくなりました。寒い時期ですから、当然身体の温まるスープやみそ汁はだれもがほしがり、2 杯飲む人がいるのかな、と思ったぐらい。実は駐車場に避難していた人たちを数えていなかったのです。見込みが甘かったとはいえ、「みそ汁が足りない!」「おれの分はないのか!」と怒鳴られるのはすごく切なかった。でも、落ち着いて頑張り、結局 600 食を調理して、希望者全員に配ることができました。

中学校のような広い敷地の避難所は、避難者の正確な人数を把握するのは難しいでしょう。でもせめて、体育館のほか、車で来て車内にいる人くら今では確認すべきでした。避難所はあっても、いろいろな理由から室内に入らず、自家用車内で過ごす人はたくさんいるんですね。これからは、そういう人たちのことも忘れません。



インタビュー日：2012 年 9 月 19 日

浦安市 60代 男性 自治会役員



指揮官いなくとも気心知れた者同士で難局に立ち向かう

東日本大震災発生当日は自治会長である私は、京都へ旅行中でした。浦安の自宅には息子がいましたが、連絡は取れません。テレビから流れるニュースは津波の話ばかり。これには正直、参りました。その後、浦安も被害を受けているらしいと知ったときは、団地の自治会長をやっている立場から、団地の皆さんはどうしているだろうか、大丈夫か、混乱しているのではないかと、我が家のこと以上に不安でいっぱいになりました。

甚大な被害を受けたニュースばかりが放映され、当たり前のことですが被害の小さいところは全く情報が入ってこない。しかし、住民には足の不自由な方や高齢者、独居者もいましたから心配でした。翌々日の13日には、車を飛ばしてやっと戻ってきたとき、自治会や住民の皆さんの顔を見て全員の無事がわかり、ホッと安どしたのを記憶しています。

しかし、自治会長が指揮を執らなくても粛々と自治会メンバーが各自の仕事を分担していたときは本当にうれしかった。これも日ごろの自治会の交流があったからだと思っています。だれが何を担当するということを決めなくても、おのずと気心知れた者同士では得意な仕事を各自がこなしていく。それを緊急時に見事に力を発揮してくれたのだと思います。夏祭りなど、日ごろの活動も訓練になったのかも知れません。これまでの活動を通じて培った連帯感が、信頼感につながって、今回の被災を乗り切れたのだと思います。



インタビュー日：2012年8月29日

一日前プロジェクト みんなでやってみよう!

----- 簡単な手順を紹介します -----

まず、過去の自然災害(地震、水害)の中から対象を選ぶ

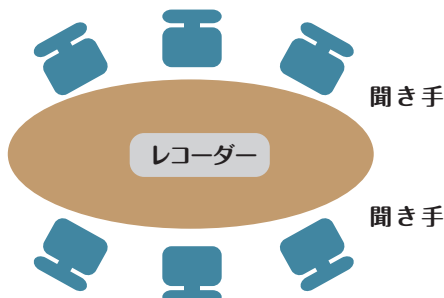
その災害の被災経験者や災害対応経験者に声をかける

みんなが集う場所と時間を設定する

※所要時間は2時間

なごやかな雰囲気の中で、当時を思い出しながら、体験したり感じたことを話し合ってもらおう

※話し手は、2~4人が適当



「教訓」や「知恵」につながる部分を拾い出し、タイトルをつける

テープ起しなどを基に、拾い出した部分を物語にする

※物語は、300~500字程度で、できるだけ切り口を残して編集

※物語の情景をあらわすイラストや写真等を添えると効果的

作成した「物語」を地域や職場のみんなに読んでもらう

気づき

共感

反省

「一日前プロジェクト」とは、地震や水害などの自然災害で被災した方や災害対応の経験をもつみなさまにお集りいただいて、

- 被災前後の行動
- 体験を通じて上手くいったと思うこと、失敗したと思うこと
- もう一度災害が発生したならば、次はどのように行動したいか
- そのために日頃から何を準備しておけばよかったか

といった本音の話をお聞かせいただき、これらの話から導き出されるさまざまな教訓や身につまされる体験をショートストーリー(エピソード)に取りまとめるという活動です。

こうして取りまとめたエピソードを広く活用・普及させることで、地域のコミュニティや国民一人ひとりに、防災・減災への関心や意識を高めていただくことを目的としています。

ここで紹介する物語は、ほんの一部です。一日前プロジェクトから生まれた物語は、内閣府の「災害被害を軽減する国民運動のページ」<https://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/ichinitimae/index.html>に掲載されています。ぜひ、アクセスしてみてください!きっと、あなたの心を動かす物語が見つかるはずです。

■一日前プロジェクトの物語・イラストは、非営利の目的であれば、広報誌やパンフレットなどで自由にお使いいただけます。「災害被害を軽減する国民運動のページ」(<https://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/>)からダウンロードしてください。



発行 内閣府(防災担当)

〒100-8914 東京都千代田区永田町1-6-1(中央合同庁舎8号館)

TEL 03-5253-2111 URL <https://www.bousai.go.jp>